

太平天国と湘軍の湖南岳州、湖北武昌と田家鎮をめぐる攻防戦

菊池秀明

はじめに

筆者は別稿において、西征軍の湖北、湖南における活動と湘軍の登場について分析した。1853年末に太平軍が黄州で清軍と対峙すると、旗人出身の湖北巡撫崇綸は咸豊帝の漢人官僚に対する不信感を利用し、湖広総督呉文鎔を排撃して彼を死地に追い込んだ。堵城の戦いに勝利した太平軍は漢陽、漢口を占領して湖北各地へ軍を進め、物資獲得のために有力者に貢ぎ物を求めたが、彼らを活用して安定した地域経営を行うことは出来なかった。むしろ反体制勢力の掠奪、暴行や諸王の親族（国宗）による無秩序な取り立てに苦しんだ人々は、団練を組織して太平軍に抵抗するようになった。

この頃湖南では曾國藩が湘軍の創設に取り組んでいた。彼は新興のエリートで、中国官界の腐敗と無気力に批判を持っていたが、団練大臣に任命されると湘郷県団練を母体に同郷意識と下層エリートの師弟関係に基づく結束力の強い私的軍隊を作り上げた。1854年2月に曾國藩は『粵匪を討伐すべき檄文』を出し、太平天国を儒教「文明」に挑戦する異端宗教としてその攻撃性を批判した。また太平軍の中核を占めた広西、広東出身者の長江流域の人々に対する抑圧的な態度を非難し、ローカルなパトリオティズムを煽ることで人々を太平軍との戦いに駆りたてた。それは清朝への忠誠というよりは、太平天国参加者もめざした下層民の政治的上昇を、自分たちがイニシアティブを取って進めようとするものだった。この点で太平天国と湘軍は競合関係にあり、その故にこそ曾國藩は太平天国との差異を強調し、彼らへの敵意を煽る必要があったのである¹⁾。

本章は湘軍が太平軍に初めて勝利した湘潭の戦い以後、1854年末にかけて湖南北部および湖北各地における両軍の戦いを検討する。具体的には太平軍の第2次武昌占領と湘軍による奪回、湖南岳州の戦いと湖北田家鎮をめぐる攻防戦などを取り上げる。長江中流域の戦局を左右したこれらの戦いについては、すでに太平天国史研究の分野で簡又文氏²⁾、羅爾綱氏³⁾、朱哲芳氏⁴⁾、賈熟村氏⁵⁾、崔之清氏ら⁶⁾の著作がある。また龍盛運氏⁷⁾、朱東安氏⁸⁾、王継平氏⁹⁾は湘軍史研究の立場から分析を進め、アメリカではF. キューン氏が地域社会の軍事化という視点から湘軍の活動を中国近代史の中に位置づけた¹⁰⁾。日本では近藤秀樹氏が曾國藩の伝記の中でこの時期の歴史を取り上げている¹¹⁾。

本章はこれらの成果を受け継ぎながら、近年公開された檔案史料集と筆者が収集したいくつかの史料を用いて分析を進めたい。また西征を19世紀中葉の長江流域における社会変容

という視点から捉え直し、太平天国と湘軍の争いがもたらした影響について検討する。それは太平天国の歴史を新たな中国近代史像に位置づける作業になると思われる。

一、曾天養軍の湖南進出と岳州の戦い

(a) 曾天養軍の湖南進出と太平軍の第二次武昌占領

湘軍が湖南湘潭県で太平軍に勝利した頃、湖北では一度解任処分を受けた湖広総督台湧率いる清軍が不甲斐ない戦いを続けていた。1854年5月に彼は応山県、徳安府（安陸県）、雲夢県を奪回したと報じたが、その実太平軍は秋官正丞相曾天養（広西桂平県古林社人）の軍が西進したために戦線を縮小し、「賊衆は果たして前夜、雨に紛れて徳安へ逃げ戻った」¹²⁾「捉えた人々や輜重を水路で陸続と漢口へ運び、長髪の逆匪もまた皆次々と退散した」とあるように自ら撤退したに過ぎなかった。むしろ安陸府（鍾祥県）を出発した曾天養軍が荊門州を占領すると、台湧は防衛に努めなかった知府馮国禎らを告発し、湖北との省境に留まって前進しない河南南陽鎮総兵柏山に対する不満を申し立てた¹³⁾。しかし台湧自身は徳安付近の応城県を奪回したものの¹⁴⁾、さらに南下して武昌の救援に向かおうとはしなかった。その結果、6月に太平軍が武昌を陥落させると、台湧は「毫も布置がなく」「大局を誤らせた」¹⁵⁾との理由で更迭されることになる。

だがこの頃、湖北北部の清軍にも注目すべき変化があった。後に湖広総督として太平軍の鎮圧に当たることになる荊州將軍官文（満洲正白旗人）の登場である。彼は旗人として曾國藩らの活動を監督、牽制する役割を担ったため、その無能と浪費ぶりを指摘する記録は多い。だが彼は拜唐阿と呼ばれる漢訳の執事を担当し、漢軍八旗に長く籍を置くなど漢人と接触する経験を重ねた。また崇綸が呉文鎔を排撃した時に官文は同調しなかったため、その「偏見のない」態度は旗人有力者の協力を必要としていた湘軍にとって利用価値があった¹⁶⁾。5月9日に曾天養軍が荊州に向かう要所である龍会橋を攻めると、官文は遊撃王国才率いる兵1,200名に迎撃させ、これを撃退した¹⁷⁾。また宜昌府城を落とした曾天養軍が西から荊州をめざすと、都統貴陞と王国才の軍を派遣してこれを防がせた¹⁸⁾。さらに清軍が荊州東部の監利県を奪回すると、6月に官文は曾天養軍を追撃して長江南岸の湖南省へ入っていた軍を呼び戻し、洪湖、沔陽州方面から武昌の救援に向かわせようとした¹⁹⁾。これらの戦果は必ずしも彼が直接指揮した訳ではなかったが、長江上流域の旗人司令官に失望していた咸豊帝を喜ばせた。そして彼は武昌陥落後に湖広総督となった楊霽（漢軍廂黄人）を援助して「全局を通籌」²⁰⁾するように命じられた。

さて湘潭の敗北後、靖港から撤退した国宗石祥禎（翼王石達開の兄）、国宗韋志俊（北王韋昌輝の弟）の部隊は、5月28日に洞庭湖北岸の華容県を占領した²¹⁾。ここから石祥禎らは船で軍を進め、6月8日に西岸の龍陽県へ到達し、11日には常德府城を陥落させて城内の文武官員、兵士を殺した²²⁾。湖南へ入った曾天養の軍も11日に澧州を占領し、石祥禎らの軍と合流して安郷県を攻めた²³⁾。また別の一隊は常德から西進して桃源県を占領し、辰州

方面へ進出する構えを見せた²⁴⁾。

太平軍が湖南西部へ進出するのは初めてのことであった。李如昭『鏡山野史』によると、道光年間からこの地域では天災に加え、租税や寄付の名目を用いた軍費の苛酷な徴収、胥吏の腐敗や団練結成による訓練の負担に人々は苦しんだ。安化県では地方政府が不正を訴えられた甲書を庇ったため、冤罪を受けた人々との間に「官民が仇殺して休まず、県城は屢々戦場と化した」²⁵⁾という衝突事件が発生したという。また太平軍の接近に刺激された反体制勢力の活動も盛んで、3月に安化県の「土匪」王揚元らは2,000名を率いて県城を攻め²⁶⁾、華容県でも王光鼎らが湖北監利県の太平軍守備隊と連携して県城を陥落させた²⁷⁾。さらに石祥禎らの軍が常德を占領すると、有力者たちは家の門に「順天太平」と記された紙を貼り、香を焚き爆竹を鳴らして太平軍の「王爺」を歓迎した。また貢ぎ物として差し出された「銀錢、米穀、馬は無数」²⁸⁾にのぼった。それらは新王朝としての太平天国に対する人々の恭順の姿勢を示すものであったが、曾天養の作戦活動がそうであったように太平軍にこれらの地を経営する意志はなかった。このため石祥禎らは「四出して焚劫し、いたるところで土匪が争ってこれを導き、境内は殆ど遍く蹂躪された」²⁹⁾とあるように地元の反体制勢力の協力のもと食糧と財産、船と人を徴発すると、「秋になったら長沙を攻める」³⁰⁾と言い残して岳州へ引きあげたという。

いっぽう武昌では太平軍による城の包囲が続いていた。5月に湖北巡撫青麐が行った上奏によると、呉文鎔の出撃後、武昌に残された清軍は4,600名ほどで、城内の守備に3,000余名を割き、残る1,500名と都統魁玉の率いる満洲兵八百名、前任巡撫の崇綸が募集した壮勇数千名を城外の洪山などに駐屯させたが、漢陽、漢口に差し向ける兵力はなかった³¹⁾。初め太平軍は湖北各地に食糧徴発の兵船を派遣したため、漢陽に停泊する船は1,000隻に満たず、「その夥党は多くなく、半ばは十二、三歳の子どもに呐喊して助勢させている」³²⁾とあるように戦力は高くなかった。4月下旬から清軍は5回にわたり太平軍と戦って勝利したが、太平軍が「四面の道路を全て阻塞した」と補給路を断ったため清軍の兵糧が不足し、青麐は倉庫の米を放出して将兵と住民の食糧に充てさせた。

続いて青麐は湖北各地における太平軍の活動を報じている。それによると太平軍は黄州で「四郷に盤踞して、名づけて打館という」と占拠すること数ヶ月に及び、「偽示を出し、百姓に薙髮を禁止した。並んで烟戸冊を造らせ、人を派遣して管領させた」とあるように、人々に薙髮を禁じて戸籍を作成させるなど地域経営の意欲を見せた。漢陽、徳安各地でも事態は同様で、「土匪」と結んだ太平軍の恐喝に人々が怯えて逃げ出し、地方官の組織した団練も抵抗しきれないと述べた。また皆が喜んで太平軍に従っている訳ではないが、どこでも従う者は1,000人を超え、太平軍はわざわざ偵察や調査を行わなくても情報や物資を入手できる。現在湖北の豊かな地域は太平軍の制圧下にあり、誰もが蓄髮するようになったため、弾圧が遅れると太平軍と民衆の区別がつかなくなってしまうと指摘した。

さらに青麐は現在の清軍兵力では武昌を守ることで手一杯であり、他地方まで顧みる余裕

はないと述べた。また「細かく賊情を観察するに、おおよそ湖北各府を殆ど遍く搶掠すれば、省城は潰えさせずとも自ら潰えんと欲しており、実に毒計」とあるように、太平軍の戦略は湖北各地の富を奪い尽くすことで武昌を自滅させるものであり、付近の各省から援軍を派遣し、食糧の補給路を確保しながら攻撃を進めるように要請した³³⁾。

5月下旬に入ると、太平軍の軍船が再び武昌周辺に集結し始めた。常德から岳州へ撤退した石祥禎と韋志俊が、東王楊秀清から急ぎ武昌を攻略せよとの命令を受けたのである³⁴⁾。漢口から漢陽の鸚鵡洲にかけて多くの軍船が停泊し、兵力は漢口を守っていた国宗石鳳魁の軍と併せて10,000人以上、「火牛の法で省垣を攻撲する」³⁵⁾と公言していた。この時陝西將軍舒倫保の援軍は応山県で足踏みし、陝甘提督桂明も台湧のもとに留まって姿を見せなかった³⁶⁾。武昌の清軍司令部では局面を打開すべく会議がくり返されたが、ここで再び内紛が勃発した。青麐と崇綸の対立である。

二人の反目は咸豊帝の命を受けた青麐が崇綸と呉文鎔の対立原因を調査したことをきっかけに表面化した。青麐が呉文鎔に同情的な報告を送り、崇綸がアヘンの常習患者であることを通報³⁷⁾すると、崇綸は青麐が「軍機を貽誤」していると告発した。彼によれば、青麐の取り柄は「軍功証明書（功照）の濫発」だけで、小舟1隻を沈めた程度の戦果でも褒美を与えている。援軍が期待出来ない以上、現有戦力で漢陽を攻撃し、補給ルートを確認すべきであるのに、「援軍数万がすでに湖北へ入り、まもなく到着する」と記した布告を張り出し、太平軍が「退散」する期日を占うなど美辞麗句で取り繕っていると非難した。また崇綸の批判は台湧に対しても向けられ、太平軍が徳安を攻撃した時、その兵力は数百名に過ぎなかったのに、台湧は「府城を棄てて」河南省境へ逃れ、太平軍の北進を防ぐと言ったまま何の連絡もよこさないと述べ立てた³⁸⁾。

実のところ青麐は手をこまねいていた訳ではなかった。6月5日に太平軍が長江下流の磯窩で「郷民」を動員して土城を作らせようとする中、已革広東高廉鎮総兵の楊昌泗にこれを攻撃させた³⁹⁾。また漢口周辺で太平軍部隊と屢々交戦し、城内で清軍の補給路に関する情報を収集していた太平軍の「奸細」黄七舫らを捕らえて処刑した⁴⁰⁾。6月21日に楊昌泗の軍は東南から攻め寄せた太平軍を撃退したが、城内は食糧が断絶し始め、空腹で帰還した兵たちは麵餅2個しか与えられなかった⁴¹⁾。出すべき褒美もなくなり、青麐は自分の財産を差し出して「犒賞」に充てた⁴²⁾。

6月25日に太平軍は「米糧の出入に必経の地」である魯家巷を占領し、ここに陣地を構築した。事態を重く見た青麐は楊昌泗と魁玉の軍を魯家巷へ向かわせ、翌日攻撃をしかけると、漢口と鸚鵡洲の太平軍が長江を渡って塘角、鮎魚套に攻め寄せた。青麐が武勝門で指揮を取っていると、突如城内の蛇山から黄鶴楼にかけて一斉に黄旗があがり、武昌の「本地人」が太平軍に内応した。これを見た清軍は総崩れとなり、武昌は再び太平軍に占領された⁴³⁾。その実黄旗を掲げたのは応城県を退出した聖典糧陳玉成（広西藤县人）の率いる500名の太平軍将兵で、武昌県の梁子湖から省城の東南へ回り込み、城壁をよじ登って城内へ進入し

たという⁴⁴⁾。

武昌城が陥落すると、青麿は「いにしへの軍を移して餉を得る法」に倣い、自ら1隊を率いて咸寧県を攻め、兵糧を手に入れて将兵に食べさせた。蒲圻県へ到達した青麿は荊州へ向かおうとしたが、船を獲得できず、長沙を経由することにした⁴⁵⁾。初め咸豊帝は青麿が私財を投じて褒美を出し、士気を鼓舞したことを讃えていた。だが武昌陥落後に青麿が台湧、官文の陣営へ赴いて速やかな反攻を試みず、遠く長沙へ向かったのは「城を棄てて逃げた」「越境して生を偷んだ」のであり、これを許せば地方官の「守土の責」は空文になってしまうと激怒した。そして青麿が荊州に到着次第、処刑するように官文に命じた⁴⁶⁾。

8月に青麿が処刑されると⁴⁷⁾、11月に曾国藩は崇綸を告発する上奏を行った。彼は武昌が陥落したのは「実に崇綸、台湧の良からぬ処置、多くの誤りが原因であり、人々はこれを骨の髄まで恨んでいる」と訴えた。とくに崇綸は青麿に対してあらゆる妨害を加え、護衛の兵も武器製造のための費用も出さず、会って情報を知らせることもしなかった。青麿は長沙に到着後、「崇綸の多方にわたる掣肘、台湧の坐視して救わぬ」やり方について語ったが、司令官同士が不和で、相手を排斥していたのでは勝利出来る筈がない。武昌の人々は青麿が「賊の擄掠を追い払い」「民の苦しみを哀れむ告示を出した」のに対して、崇綸は「大清の赤子」を全く哀れまなかったと証言している。加えて武昌陥落の時、崇綸は軍と共に城を脱出したにもかかわらず、1日前に北京へ召還されて城を出ていたと嘘をつき、責任を免れようとした。自らは「城破れて逃げのびた罪」を隠し、死者を弾劾して誹謗するとは「無恥の最たるもの」でなくて何であろうかと結んでいる。

ここで曾国藩が崇綸を批判したのは、第一に崇綸と対立して解任された張亮基や死地に追いやられた呉文鎔の汚名を雪ぐためであった。だが彼が旗人であった青麿を弁護し、「公論」に基づいて崇綸の「私怨」を告発した背後には、単なる満漢官僚間の争いに止まらない清朝体制とりわけ恣意的な裁断を下す不明な皇帝に対する失望があった。曾国藩は崇綸を「僅かに革職」にしかたけで、青麿に全ての罪を負わせた咸豊帝に「聖主は自ずから一定の権衡があり、微臣があえて申し上げることはいたしません」⁴⁸⁾と強烈な皮肉を送っている。これを見た咸豊帝は崇綸の搜索と北京送還を命じたが、彼は治療先の陝西で服毒自殺を遂げ、病死と報じられた⁴⁹⁾。曾国藩はバランス感覚を欠いた狭量な青年皇帝のもとで、困難な太平軍との戦いに臨まなければならなかったのである。

(b) 湘軍の再編制と岳州の戦い

太平軍が常德、武昌を攻略していた頃、曾国藩は湘軍の再編制を進めていた。靖港で敗れた彼が長沙へ帰還すると、「湘勇が屢々潰えたため、常に市井の小人に侮辱され、官紳の間にもこれを弾劾する者がいた」⁵⁰⁾とあるように、彼の強引な手法と無様な結果に批判が集中した。曾国藩は自らの「智略の不足」を理由に処罰を求め、「遺摺」をしたためて自殺を考えた⁵¹⁾。だが湘潭における勝利の知らせがもたらされると、それまで彼と対立していた湖南

の地方官僚や旧来のエリートたちは沈黙した。とくに大きかったのは報告を受けた咸豊帝が「大いに悦」⁵²⁾び、「湘潭の全勝」と「水勇の甚だ出力」に免じて曾国藩を解任処分にとどめ、引き続き湘軍を統率するように命じたことだった。また湖南提督鮑起豹が「株守無能」の罪で更迭され、旗人でありながら湘軍に加わった補用副将の塔齊布が提督職の代行を命じられたことは、湖南の官界における政治闘争で湘軍に結集した新興エリートが勝利したことを示すものだった⁵³⁾。

次に曾国藩は3度にわたる湘軍の戦いぶりを総括し、その問題点として賞罰の規定が不明確であるために不正が絶えず、軍の規律が維持できないことを挙げた。彼は弟たちに宛てた手紙の中で次のように述べている

水勇は〔三月〕二十四、五日（四月二十一日、二十二日）から成章詔の營（五百人の大隊をさす——筆者註）で逃げ出す者は百余人、胡維峰の營からも数十人が逃げた。二十七日（四月二十四日）には何南青の營から一哨（百人）が逃げ出し、戦船と大砲を東陽港に棄てて、船の中にあった銭、米、帆、布などを全て奪い去った。二十八日（四月二十五日）には各營で脱走する者が三、四百名に及んだ。初二日（四月二十八日）の靖江^{ママ}の敗北を待たずして勇は逃げたのであり、この時の軍の総崩れは後から起きたものなのである。

その湘潭で戦い勝利した五營についても、ただ賊の財産を奪い取ることしか知らず、全く長沙へ戻ろうとしないで、すぐに〔湘郷〕県城へ逃げ帰った。ひどい場合は戦船で湘郷県内の河辺に乗り付け、勇たちは上陸して逃げ帰り、戦船が漂流して荷物が失われるに任せた。彭雪琴（彭玉麟のこと）が漕ぎ手に褒美を与えようとしたところ、漕ぎ手は突然頂戴を見て、ついに名簿に記された姓名は全て嘘であると告白した。応募する時に適当な名前を報じておけば、将来数が揃わなかった時に、名簿をもとに探されることもないだろうと思った云々。思うにあらかじめ逃げ場を作ろうとして、名前を偽ることを考えたのだろう。湘勇の良心の喪失ぶりがわかろうと言うものだ。もしすでに逃亡した者を再び招いたりしても、断じて力にはならない⁵⁴⁾。

王闈運によると、靖港の戦いで曾国藩は岸辺に「旗を越えた者は斬る」と記した旗を立てて軍の崩壊を防ごうとしたが、兵士たちは旗を迂回して逃亡し、功を奏さなかった⁵⁵⁾。だが右の手紙からは、それ以前にも湘軍の各部隊で逃亡者が続出し、掠奪を働いた後は集団で帰郷しまったことがわかる。彼らは逃亡に備えるため偽名で応募しており、同郷出身者を集めることで軍の結束と相互監視を強めようとした曾国藩のもくろみは外れた。加えて逃げたのは兵士ばかりではなかった。湘郷県知県朱孫詒は岳州で敗れて逃げ帰り、寧郷県でも敗北して「逃奔すること数次」であったが、長沙帰還後は宝慶府代理知府に昇進した。また王鑫は独断的な行動で「大局を貽誤」させたにもかかわらず、石潭で殺した太平軍将兵の数を30

人から数百人に水増しして「ニセの勝利」を報じた。曾国藩はこうした風潮を「是非を顛倒することかくの如し」と憤慨し、乱世とは必ずこうした「是非の不明、白黒の不分」から起こるのだと力説している⁵⁶⁾。

こうした認識に基づき、曾国藩は大規模な兵員整理を行った。岳州、湘潭の戦いで戦果をあげた塔齊布、候選知県彭玉麟、守備楊載福、貢生鄒寿章と平江県知県林源恩（四川達州人）の率いた4,000余名を除き、全ての部隊を解散し、曾国藩の弟である曾国葆も整理の対象になった⁵⁷⁾。また彼らと同知羅沢南、彼の弟子である李統賓（童生、湘郷県人）に新兵の募集を行わせ、陸軍7,500名、水軍5,000名を集めた。とくに損失の大きかった水軍については、戦船60隻の建造100隻余りの修理を急がせると共に、新たに道員李孟群の率いる両広水勇1,000名、総兵陳輝龍の率いる広東水軍400名を加えた⁵⁸⁾。さらに呉文鎔の招きに応じて親兵600名を率いて戦線へ到着したが、呉文鎔の死によって行き場を失っていた貴州道員胡林翼の部隊を吸収し、出撃の準備を整えた⁵⁹⁾。

この時曾国藩が記した『新募の郷勇に曉諭す』は、「もし早く武芸を学んで習得せず、賊と遭遇して戦ったら、なんじは彼を殺すことが出来ず、彼はおまえを殺す。もしおまえが退却しても、国法を逃れることはできない。だから武芸を学ぶことはおまえたち自身の生命を守ることなのだ」とあるように、太平軍と戦うために武芸を鍛錬するように命じている。また勝利の暁に得られる褒美について次のように述べている。

- 一、戦いで賊一名を殺した者に銀十両の褒美を与え、併せて八品軍功を与える。
- 一、賊二名を殺した者には銀二十両の褒美を与え、併せて六品軍功を与える。
- 一、賊三名以上を殺した者は、銀三十両の褒美を与える他に、上奏して軍内で千総、把総として任用できるようにする。

ここからは湘軍が郷土湖南の防衛や清朝への忠誠といった理念に奉仕するよりは、太平天国の将兵を組織的かつ効果的に殺害することを目的とした武装集団へ転化したことが窺われる。またこの目的を達成するために、「戦場で逃亡した者は斬殺する。功績を偽った者はさらし首とする」⁶⁰⁾という厳しい軍律が設けられた。それは反体制勢力への苛酷な弾圧で「曾剃頭」と揶揄された曾国藩のパーソナリティーや中国専制王朝のかかえた抑圧的な体質の現れであったが、偶像崇拜者と見なした旗人や清朝官僚、将兵を徹底的に排撃した太平軍の行動がもたらした一つの反作用でもあった。いずれにせよ、この再編によって湘軍の戦闘力は飛躍的に高まり、太平軍は苦戦を強いられることになる⁶¹⁾。

7月7日に曾国藩はまず即補知府褚汝航らの率いる水軍2,000名を進発させ、洞庭湖東岸の鹿角に停泊させて太平軍の南下を防いだ。陸軍は塔齊布（中路）率いる主力7,000名が岳州南方の新墻市を占領し、羅沢南と岳州府知府魁聯の率いる湘勇、宝勇2,000名がこれを支援した。また胡林翼率いる1軍（西路）は常德の救援に向かい、林源恩の平江勇、江忠淑

の楚勇（東路）は平江県から湖北通城県へ軍を進めた⁶²。

7月23日に褚汝航らは洞庭湖の君山、雷公廟で曾天養の率いる太平軍の水軍と戦い、戦船百余隻を焼いた。曾天養は岳州を放棄して城陵磯へ退き、25日に湘軍は岳州府城を占領した【図1】。27日に曾天養は400隻余りの船で反攻を試みたが、湘軍は三方からこれを迎え撃ち、太平軍は船70隻以上を奪われ、丞相の汪得勝ら400名余りの死者を出して敗退した。太平軍の陸上部隊も塔斉布の軍に敗れ、曾天養は臨湘県へ退いた⁶³。

湘軍による岳州進攻の知らせは、7月30日に南京にいた翼王石達開のもとへ届いた。この時曾天養が「妖魔が作怪（蠢動の意味——筆者註）をなし、勝利を得ることは難しい。おそらくは岳州の城は守りきれないだろう」と厳しい戦況を報告すると、石達開はこれをすぐに東王楊秀清へ伝えると回答した。また彼は曾天養に次のような指示を与えている。

君たちは外にあつて、何事も臨機応変に防衛に努めるべきである。もし岳州城を守ることが難しければ、君たちは下流に退いて強固な陣地を築き、東王の誥諭を待ってこれを行い、怠慢で誤ってはならない。なべて天父が大いに天恩を開かれ、大いに権能を顕かにされるのを待て。あれらの妖魔を自由に泳がせておいても、決してわが天父、天兄の計略から逃れることは出来ないだ。特にいまこの道理を将兵たちに説き聞かせ、彼らに別な考えを持たせてはならない⁶⁴。

ここで石達開は岳州の防衛にこだわらず、下流で防備を固めるなど柔軟な戦略を取るように命じている。彼は太平天国の中では宗教色の希薄な指導者であったとされるが、史料では「天父が大いに天恩を開かれ、大いに権能を顕かにされるのを待て」と述べるなどヤーヴェの庇護を強調している。また「わが天父、天兄の計略」とは偶像崇拜者である清朝が滅ぼされ、太古の中国における上帝崇拜への回帰をめざす太平天国が勝利すべきであるという彼らの信念であり、石達開はこれを「説き聞かせ」ることで将兵の動揺を鎮めようとした。ここからは太平軍が殺戮を目的としがちな湘軍に比べて明確な理念を持ち、それを人々に周知させようとする集団であったことがうかがわれる。

7月30日に武昌を陥落させた韋志俊、北王麾下の殿前丞相張子朋らが戦船100隻余りを率いて救援にかけつけ、曾天養らと共に再び岳州を攻めた。湘軍は褚汝航らが道林磯で迎撃し、楊載福が背後から火攻めをしかけた。混乱に陥った太平軍は400隻の船を失い、検点黎振輝など2,000名近い死者を出して敗退した。また8月7日にも韋志俊、曾天養は城陵磯で湘軍と戦ったが、数百名の死者を出して敗れた⁶⁵。

戦況が不利と見た太平軍は再び漢口から援軍を送り、8月9日に3度岳州を攻撃した。湘軍はようやく戦線に到着した陳輝龍の広東水軍が迎撃し、褚汝航もこれに加わった。初め湘軍は勝利したが、広東水軍が深追いしたところを太平軍に反撃され、部隊は全滅して彼と褚汝航、同知夏鑾が戦死した⁶⁶。以後水軍は彭玉麟と楊載福が統率することになり、陸軍と同



図1 岳州を奪回する湘軍（『平定粵匪図』第一幅、克復岳州図、国立故宫博物院蔵）
 湘軍が水陸に分かれて岳州府城を攻撃している。これを『平定粵匪戦図』の絵図（冊四、克復岳州戦図、東洋文庫蔵）と
 比べると、兵士一人一人の服に「湘勇」の文字が描かれるなど、湘軍の功績を強調する内容となっている。

じく湖南人中心の部隊としての性格を強めることになった⁶⁷⁾。

だがこの勝利にもかかわらず、戦況は太平軍に有利とはならなかった。8月11日に太平軍3,000名が城陵磯に上陸して陣地構築を試みた。塔斉布がこれを迎撃すると、突然「髪を伸ばし長い顎ひげを蓄えた大賊目」即ち曾天養が単騎湘軍の陣地へ切り込み、塔斉布の名を叫びながら彼の乗馬を傷つけた。湘軍兵士が反撃すると、負傷した曾天養はなお「戈を反し相向」かって抵抗したが、多くの兵によって殺された。これを見た太平軍は「潰逃」し、800余名が戦死した⁶⁸⁾。

金田蜂起以来の名将であった曾天養の死は、太平天国にとって重大な損失であった。曾国藩は彼について「威令はもとより人々に行われ、賊中ではよく兵を用いる者として、楊秀清を除くと曾逆〔天養〕を第一に挙げた。彼が殺された後、岳州と武漢の賊は彼のために六日間肉食を断った」⁶⁹⁾とあるように、彼が軍内で絶大な信頼を得ていたこと、人々が彼の死を悼んで喪に服したことを指摘した。だがそれだけに彼の死が太平軍に与えたダメージも大きかった。曾国藩は「十八日（八月十一日）の一戦は、まさに逆焰が盛んになるところであったが、たちどころにその勢いを挫き、人心は大いに定まった」⁷⁰⁾「曾天養が死んだ後、脅されて従っていた者たちが逃げだし、その数は一万人以上に及んだ。彼の存在は賊の勢いの盛衰に関わっていたのだ」⁷¹⁾と述べ、指揮官を失った太平軍が勢いを失い、逃亡者が続出したと伝えている。

8月14日に塔斉布が城陵磯の太平軍陣地に攻勢をかけると、韋志俊の軍が応戦し、湘軍は都司諸殿元らが戦死した。18日には石鎮崙率いる援軍が武昌から到着し、翌日九塘嶺を占拠して鳳凰山で塔斉布、羅沢南、李統賓の湘軍と戦った。この戦いは「賊の慣技に螃蟹陣なるものがあり、常に十路余りに分かれて囲み襲う。わが軍もまた十路余りに分かれて迎撃し……、叫び声は天を震わせた」とあるように激戦となったが、太平軍は勝利することは出来なかった。すると22日に韋志俊、石鎮崙は「二度の敗北の後、激しく憤り、大挙して再び決戦を試みた」とあるように陸上に兵力を集中して総攻撃をかけた。太平軍の水軍が手薄に違いないと見た曾国藩は、楊載福と守備蕭捷三、李孟群に水軍を率いて攻撃させた。はたして「この日悍賊は均しく陸路に集まり、船に留まっていた賊は一隻当たり僅かに六人、半ばは臆病な弱賊で、残りは脅されて従った漕ぎ手であった。わが軍が賊舟を焼くのを見ると散り散りになって水に飛び込み、悍賊がこれを制止しても止まらなかった。このため水軍は僅か数時間の戦いで、賊を殺すこと千人近くに及んだ」とあるように、元々武昌の守備に当たっていたこの部隊は戦力が弱く、湘軍の攻勢にあっけなく敗北した。陸路の軍も500人以上の死者を出して敗退した⁷²⁾。

このように太平軍は主導権を取り戻すことが出来ず、岳州奪回は不可能と見た韋志俊、石鎮崙の主力は武昌へ撤退した。8月25日に湘軍は城陵磯の太平軍陣地を攻め、「陣地はすでに空で、僅かに数十人の賊が沢山の旗を並べ、槍炮を放っているだけだった」とあるように残存していた守備隊2,000余名が殲滅された。また水軍は新堤まで追撃し、各地で太平軍の

軍船を焼いた。太平軍は「逃散する者が殆ど万人」とあるように、多くの落伍者を出しながら湖南から退いたのである。

二、湘軍の武昌奪回と田家鎮の戦い

(a) 湘軍の武昌奪回と太平天国、清朝

岳州の勝利によって湘軍の士気は大いに上がった。曾国藩はこの戦いを総括して「逆賊は常德、澧州で掠奪を尽くして帰ってくると、岳〔州〕城を占拠した……。わが軍が岳城を奪回し、水陸で屢々勝利すると、湖北から二万人を集めてことごとく侵犯してきた……。三度の戦いで、この逆匪の勢いは頓挫し、私共は彼らが逃亡するつもりであることを知った。以前から賊は逃げ出そうとする時に、往往にしてわざと虚勢を張り、進撃する振りを見せる。幸いわが軍は計略を見抜き、一鼓のもとにこれを掃蕩した。このため賊の火薬、武器、旗幟、馬などは何一つ持ち帰れたものはなかった。加えて水軍は力の限り追撃し、〔長江〕沿岸二百里の賊巢をことごとく破壊した」⁷³⁾と述べ、太平軍の戦術を見極めた完全な勝利であったことを強調した。この上奏を受けた咸豊帝は曾国藩に三品頂戴を与え、「水陸の官軍を率いて直ちに武漢を搗き、楊需が率いる官軍と共に妖氛を速やかに掃せよ」⁷⁴⁾とあるように、急ぎ下流へ進撃して武漢三鎮を奪回するように命じた。

だが湘軍にとって湖南省外への遠征はそれほど簡単ではなかった。第一の問題は15,000人に拡大した将兵、随行人員の食糧補給であり、毎月銀6、70,000両が必要となった。また広東水軍の全滅によって不足した戦船、大砲の製造と修理も不可欠であった。曾国藩は岳州に補給基地である糧台を設置し、湘軍の創設に関わった湖北布政使夏廷楹に「総理」させた⁷⁵⁾。また駱秉章は湖南を代表するエリートであった丁善慶（長沙岳麓書院山長）らに協力を求め、彼らに寄付を募って「船砲を捐辦」⁷⁶⁾させることにした。

第二の問題は岳州から武昌にかけて残る太平天国の地方軍であった。これらは崇陽県の鍾人杰反乱と関連が深い呼応勢力で、総制廖敬二（崇陽県人）を中心に20,000人余りが蒲圻、咸寧など周辺各県に立てこもっていた。また長江流域の小河川にも太平軍の水軍が潜伏し、後方を攪乱する危険があった。このため湘軍はまず塔齊布が陸路崇陽県へ進攻し、曾国藩の水軍は「遍く支湖、小河を搜索」⁷⁷⁾しながら慎重に前進することにした。また先に崇陽、通城県で戦った経験を持つ胡林翼、江西救援の要請を受けた羅沢南の軍を同行させて万全を期した⁷⁸⁾。

これに対して太平軍は十分な反撃体制を整えることが出来なかった。その最大の原因は8月に総兵呉全美率いる清の水軍が長江を封鎖すると南京の食糧補給が滞り、韋志俊らが急ぎ南京へ呼び戻されたためであった⁷⁹⁾。代わって武昌の守備を任された国宗提督軍務の石鳳魁（石達開の堂兄）は「軍務に諳じず」⁸⁰⁾と軍事的才覚に欠けていた。これを補佐する地官副丞相の黄再興（広西桂平県人）も太平天国内で詔書の作成などを担当し、石達開が湖北経営のために「安民造冊」⁸¹⁾即ち戸籍を作成するべく派遣した人材であり、戦闘経験は殆どなか

った。加えて漢陽、漢口を守っていた太平軍部隊の戦力は低く、指導部は各地の呼応勢力を武漢三鎮の防衛に動員するだけの統率力を持っていなかった。太平軍将兵は湘潭、岳州の敗北で受けたダメージを回復出来ないまま、湘軍の新たな進攻にさらされることになったのである。

9月3日に楊載福らの湘軍水師は湖北黄蓋湖の太平軍を攻撃し、翌日には上陸して官文が派遣した軍と共に嘉魚県城を占領した。また守備蕭捷三らの軍は武昌上流の要地である金口鎮に進駐し、19日に太平軍の進攻を退けた。陸軍はまず羅沢南の湖南、湖北省境の羊楼峒に向かい、16日に太平軍の守備隊千名を破った。すると18日に廖敬二が崇陽県から3,000名余りを率いて攻撃をしかけたが、羅沢南はこれを撃退した⁸²⁾。

ここで塔齊布は陸軍を二手に分け、彼自身は北路から崇陽県城をめざし、羅沢南は南路を進んだ。9月23日に羅沢南は崇陽、蒲圻県境の要所である神橋、桂口で太平軍千数百名を撃破し、この地方の太平軍頭目である熊満珠、沈応隆の家を焼いた。24日に塔齊布は崇陽県に到達し、太平軍2,000名の抵抗を打ち破って県城への攻撃を開始した。翌日には羅沢南の南路軍も到達して攻撃に加わり、崇陽県城は陥落した。曾国藩は崇陽県が長く反体制勢力の拠点だったために抵抗も激しく、「官軍の死傷者はこれ以前の戦いに比べて独り多かった⁸³⁾と報じている。だが太平軍の抵抗は各地のリーダーが1,000名規模で根拠地に立てこもるなど分散的で、湘軍に個別撃破されてしまったことがわかる。投降者も多く、湘軍が告示を出して解散を呼びかけたところ、「賊営から髪を剃って逃げ出し、故郷に帰るために路票（証明書）を求める者が殆ど四千人に及んだ⁸⁴⁾という。

崇陽県を占領した湘軍の陸上部隊は再び二手に分かれ、塔齊布が蒲圻県へ、羅沢南が咸寧県へ向かった。太平軍は武昌から派遣された救援軍800名が「崇陽逃匪」と合流して咸寧県城で抵抗を試みたが、9月30日に羅沢南の攻撃によって城は陥落した⁸⁵⁾。むろん反撃がなかった訳ではなく、湘軍移動後の10月4日に廖敬二は崇陽県城を奪回した⁸⁶⁾。また同じ日に石鳳魁らは武昌、崇陽、興国州から7,000名の兵を動員し、咸寧県を攻めて湘軍の北進を防ごうとしたが、横溝橋で羅沢南の軍に敗北した⁸⁷⁾。

この頃楊秀清から「湖北へ行って河道を稽查し、秘かに奸宄を捕らえよ⁸⁸⁾と命じられた燕王秦日綱は、蕪州で清軍の攻撃を受けていた陳玉成に対して「陣地を構築し、兵士を統率して、用心深く臨機応変に防衛に努め、妖魔を乱入させてはならない」と拠点の死守を命じた。また万事ヤーヴェの庇護があるから慌てるには及ばないと述べたうえで、「その他の一切の軍務については、よろしく東王の告諭に従って行え⁸⁹⁾と述べている。ここからは先の石達開の指示とは対照的に、彼から報告を受けた筈の楊秀清が戦況の変化を充分認識しておらず、秦日綱も柔軟さに欠けた命令で傷口を広げたことが窺われる。

いっぽう湘軍の水師は金口鎮に集結し、10月2日には曾国藩も姿を見せた。翌3日に彼は李孟群、魁玉、楊昌泗の軍に護衛されながら漢陽西南の沌口へ向かい、敵情視察を行った。羅沢南と塔齊布が武昌西南の紙坊に到着すると、二人は10月8日に金口に向いて曾

国藩と武漢三鎮の攻略法について協議した。その結果まず水軍で長江を肅清し、武昌と漢陽の連絡を遮断する。陸軍の塔齊布は紙坊に駐屯し、武昌東南の洪山を攻める。羅沢南は金口から長江東岸の花園を攻め、その後古馱路から洪山を攻める。荊州軍の魁玉、楊昌泗は長江の西岸を進み、新総督楊霽の軍と呼応して漢陽を攻めることを取り決めた⁹⁰⁾。

10月12日に湘軍は3方面から進撃を開始し、羅沢南は4,000名で花園の太平軍陣地を攻め、太平軍の軍船百余隻を焼いた。荊州軍4,300名も西岸の蝦蟆磯を攻め、併せて漢陽西の拠点である鸚鵡洲を奪った。水軍は李孟群、楊載福、蕭捷三が長江から進み、兩岸の太平軍が呼応できないようにした。また漢関から鮎魚套口へ進撃し、太平軍の軍船300隻を焼いて多くの将兵を殺した。翌13日に湘軍は武漢三鎮を攻撃し、水軍は漢陽、漢口に残っていた太平軍の軍船三百隻を焼いた。陸軍は李孟群と荊州軍が漢陽晴川閣、大別山の太平軍陣地を破壊し、羅沢南らも武昌鮎魚套付近の陣地六カ所を破った。これによって「省河の上下は一隻の賊船もなく、武漢の城外は一つの賊営もない」⁹¹⁾とあるように武漢周辺の太平軍水軍は壊滅し、城外の太平軍陣地も全て失われた。

この戦いについては、武昌陥落後に秦日綱が楊秀清へ提出した報告が残されている。それによると石鳳魁は武昌城の望山門一帯を、黄再興は大東門一帯をそれぞれ守り、金口鎮から20キロメートルの白沙洲に水軍3ヶ軍を配置した。また漢陽は指揮古隆賢（後の奉王）と曾天養の弟である曾水保が守り、長江上游の上関にも2ヶ軍を置いたが、漢口に守備兵を置く余裕はなかった。湘軍の攻撃が始まり、「妖船三、四十条」が上関と漢口小河口に攻め寄せて「作怪」すると、「聖兵は長江の兩岸から大砲を放ち、並んで砲船を用いて行く手を阻んだ」が、勝敗はつかなかった。その後湘軍が鸚鵡洲、漢口、白沙洲と鮎魚套口を占領すると、「聖兵は持ちこたえられなくなり、ついに武昌に撤退して、各門を堅く閉ざし、厳密に防守した」とあるように太平軍は武昌城内へ撤退した。

10月14日に太平軍は3ヶ軍の兵力で城壁を降り、洪山に駐屯していた塔齊布の陣地を攻撃した。この時「妖魔三、四千が藍、白、黄、黒などの妖旗を手に、紙坊街から陸路紅山（洪山をさす）へ回り込み、進んで応戦したが、甚だ作怪」とあるように湘軍の抵抗を受け、太平軍は撤退を余儀なくされた。だが途中湘軍に退路を断たれ、「進退両難」となって立ち往生した。武昌の防衛は不可能と見た石鳳魁らは下流の武昌県へ撤退を図り、城内から将兵を率いて「冲殺」して血路を開き、ようやく脱出した⁹²⁾。漢陽を守っていた古隆賢らも西門から蔡店へ向けて脱出した。武昌、漢陽へ入城した湘軍は城内に残っていた太平軍を掃蕩し、將軍陳昌貴、総制丁履之らを捕らえて殺害した。こうして武漢三鎮は湘軍によって占領された。

この戦いで太平軍は湘軍の攻勢を食い止めることが出来なかった。曾国藩は「この賊の城を守る方法は……精悍な者を城内ではなく城外に集め、往々にして要所を抑えて陣地を構築するため、守りが固く突破することができない……。彼らが作った三つの陣地は、深く溝を掘ること二丈の広さで、長さは約三里あり、長江の水を引いて湖まで達している。溝の内側

には木城を作り、内側を土砂で埋め、中に銃眼を開けた……。木城の内側にはレンガ造りの城と内堀があり、幾重にも防御している。その堅固さは殆ど金川の碉楼と相等しい」と述べ、太平軍が頑丈な陣地構築を行っていたことを指摘している。だがそれも「各哨官は頭を下げて弾を避けることを恥とし、また火球が賊船に当たらないことを恥とした」⁹³⁾という湘軍の旺盛な戦闘力の前には役に立たなかった。後に猪突猛進の武勇でならした陳玉成も、この時の湘軍の攻勢について「甚だ利害」であり、彼の部隊は「苦戦したが勝利することが出来ず、ただ船を捨てて退く他はなかった」⁹⁴⁾と報じている。加えて湘軍の戦闘艦に比べて見劣りする民間からの徴用船を下流に避難させなかった石鳳魁の無策は、「船を焼くこと千余り」「賊を殺すこと数千」⁹⁵⁾と重大な損失を招いた。『賊情彙纂』によると、石鳳魁では武昌を守れないと知った黄再興は、司令官を武勇で知られた指揮陳桂堂と交代させるように求めたが、間に合わなかったという⁹⁶⁾。

さて湘軍の武昌奪回に関する知らせは、10月20日に北京へ届いた⁹⁷⁾。26日に曾国藩、塔齐布による詳細な報告を受けた咸豊帝は「慰められること実に深い。これほどの大勝利は全く予想していなかった」⁹⁸⁾との殊批を記し、その日のうちに曾国藩に二品頂戴と花翎を与え、湖北巡撫を代行せよとの上諭を出した⁹⁹⁾。

ここで一つの事件が発生した。11月1日に曾国藩が上諭を受け取ると、彼は「公事においては毫も益するところなく、私心においても万に自安しがたい」「私が二年にわたり練勇、造船をしてきたことが、専らおのれの僅かな榮達を望んでいたことになってしまう」¹⁰⁰⁾ことを理由として巡撫代理の職を辞退した。無論それは本心ではなく、母親の喪に服すべき丁憂の期間中に官職を得たと批判されるのを避けるための方便であったが、彼の上奏が北京へ届かないうちに「曾国藩に兵部侍郎銜を与え、軍務を辦理させる。湖北巡撫を署理する必要はない」¹⁰¹⁾という新たな上諭が届いた。しかも彼に代わって後任巡撫に指名されたのは、湖南按察使として湘軍の結成に反対した陶恩培であった。

薛福成によると、勝利の知らせに興奮した咸豊帝にある軍機大臣が「曾国藩は侍郎として在籍の身であり、なお匹夫でございます。かような卑しき男が郷里にあって一声呼びかけただけで、蹶起してこれに従う者が万余人とは、恐らくは国家の福とはなりますまい」と述べたところ、咸豊帝は「黙々として顔色を変えること久しかった」¹⁰²⁾とある。この時曾国藩と湘軍の持つ危険性を指摘した軍機大臣が誰だったかについて、朱東安氏は従来言われてきた祁寯藻ではなく、彭蘊章（江蘇長州人）であったと推測している¹⁰³⁾。また動揺した咸豊帝が考えを変えた10月30日に、御史沈葆楨（福建閩侯県人、妻は林則徐の娘）は曾国藩が巡撫に就任すると「越境して兵を進めることが難しい」¹⁰⁴⁾と指摘し、巡撫職は楊霈に兼任させ、曾国藩に軍務に専念させるように求めた。さらに檔案史料によると、同じ日に御史唐壬森（浙江蘭溪県人）¹⁰⁵⁾、御史楊重雅（江西德興県人）¹⁰⁶⁾もほぼ同じ内容の上奏を行った。曾国藩からの辞退の上奏を見た咸豊帝は、「朕はなんじが必ず辞退すると思っていた。また軍をあげて東へ下れば、巡撫代理もその名を空しくすることを考慮して、すでに湖北巡撫を署

理する必要はないと命じたのだ」¹⁰⁷⁾と殊批を記した。それは在野の漢人勢力が台頭することを恐れた咸豊帝の意向と、太平軍の進出に怯えながらも、湖南の新興勢力が実力を伸ばすことを快く思わなかった東南沿海地域出身のエリートたちが既得権益を守るために取った行動の結果であったと考えられる。

(b) 田家鎮をめぐる攻防戦

さて武昌を退出した石鳳魁らは10月23日に湖北、江西省境に近い田家鎮へ到達し、「散兵を招集して再び進取を図」った。彼らが安慶にいた冬官正丞相羅大綱に食糧と火薬の補給を求めると、羅大綱は今回の敗北が「天父の義怒」の現れであり、兵士をよく教育、統率すれば「天父の顧みがある」と述べたうえで、安徽の米は天京へ送ったため備蓄はないが、九江一带は米価が安く購入可能であることを伝えた。また火薬はすでに九江へ送っており、秦日綱と相談するように回答した¹⁰⁸⁾。

田家鎮は1853年に西征軍が湖北へ進出した時にも攻防戦が行われた要所であった。10月20日に楊秀清は秦日綱に対して九江へ向かい、石鳳魁らの軍および殿前丞相何潮元¹⁰⁹⁾の率いる九江守備隊、漢陽北部の黄陂、孝感県から撤退してきた検点吉志元¹¹⁰⁾の部隊を指揮して田家鎮に「堅固な陣地を構築」して防備を固め、余力があれば漢陽へ向けて反攻するように命じた。また南京から張子朋、冬官副丞相許宗揚（北伐援軍に加わりながら途中引き返し、南京で牢につながれていた）を派遣したが、韋志俊、石鎮崙、国宗韋以徳の派遣を一旦取りやめるなど中途半端な対応が目立った¹¹⁰⁾。

その後武昌陥落の詳細に接した楊秀清は、秦日綱に「木箏水城」即ち筏の上に構築した可動式要塞を建造するように命じ、南京で完成した一隻を東王府承宣の涂鎮興と共に九江へ送った¹¹²⁾。また田家鎮で陣地構築に取り組んでいた石鳳魁、黄再興を南京へ連行し、敗戦の責任によって処刑した¹¹³⁾。10月29日に楊秀清は天父下凡によって自らが「継いで天下を治め、万国の事を佐理」¹¹⁴⁾することを宣言し、太平天国内部の統治権を掌握しようとした。だが当時は北伐軍が援軍と合流出来ないまま敵中深く孤立するなど、彼の権威を確立するためには失敗が許されない状況があり、それが田家鎮の防衛体制のテコ入れと石鳳魁らに対する厳しい処罰へつながったと考えられる。なお水上要塞の建造を命じられた秦日綱は木材の調達に苦しんだ。また長江を横切る形で設置された鉄の鎖は太さが足りないため、秦日綱は職人に命じてこれを鑄造させた¹¹⁵⁾。

さて引き続き軍務に専念するように命じられた曾國藩は、漢水上流から前進してきた太平軍を殲滅した後、武漢を退出した太平軍がなお数万の兵力を擁しており、太平天国の支配地域では人々が「蓄髮貢納」して解散の呼びかけに応じないと報じた。また湖南から離れるにつれて物資の補給が難しくなっていることを挙げ¹¹⁶⁾、「深く賊地に入る」ためには2、3ヶ月分の戦費が必要であり、江西から急ぎ80,000両、陝西からは240,000両を工面するように求めた¹¹⁷⁾。そして太平軍の兵力が集中している場所として長江南岸の興国州、北岸の蕪州、

広済県と田家鎮を挙げ、楊霈と協議のうえ塔斉布と羅沢南の陸軍を大冶県、興国州へ向けて出発させた（東征軍南路）。また水軍は楊載福、彭玉麟が先陣を切り、曾國藩は李孟群と共に後衛部隊としてこれに続いた（同中路）。さらに固原提督桂明と魁玉、楊昌泗の軍が陸路長江北岸を進んだ（同北路）¹¹⁸。

11月9日に楊載福、彭玉麟は先手を打って蕪州の太平軍に攻撃をかけ、陳玉成率いる水軍部隊に打撃を与えた。また羅沢南の南路軍は11月10日に興国州の塩埠頭で大冶県へ向かうとする太平軍部隊を破り、総制汪茂先を捕らえた。翌11日に羅沢南は太平軍の弾薬工場があった興国州を占領し、太平天国の進士合格者で育才官だった胡万智を捕らえた。育才官とは地方で知識人の太平天国参加を促す官職のことで、この年九月に武昌で実施された太平天国の湖北郷試では彼の働きかけで多くの興国州人が参加した¹¹⁹。太平天国が安定的な支配を実現するためには、地域社会で発言力を持った知識人の支持を得ること不可欠であり、この時の郷試では「その資格を寛くし、仕途をもって誘」って800名の合格者を発表したとある¹²⁰。また秦日綱が石達開へ宛てた報告によると、胡万智および安徽池州、湖北黃州出身の科挙合格者にそれぞれの任地で民政を担当させたという¹²¹。

だがこれら地域経営の努力も、湘軍の攻撃によって成果は水泡に帰した。11月11日に塔斉布の軍が大冶県を攻略したところ、抵抗した数名の太平軍兵士が塔斉布の乗馬を傷つけた。怒った塔斉布は捕虜にした百数十名について、「目を抉ったうえで凌遲処死にし、もって住民の憤りを晴らした」¹²²と厳しい報復措置を取った。

興国州、大冶県を占領した羅沢南、塔斉布は、11月18日に田家鎮南岸の富池口、半壁山へ軍を進めた。曾國藩は太平軍の防御態勢とこれらの地の戦略的な重要性について次のように指摘している。

逆党は全力で田家鎮を占拠し、蕪州からこの地まで四十余里にわたって沿岸に土城を増築し、大砲を安置している。河面には鉄鎖を用いて横に亘らせ、水軍の進攻を阻んでいる。その南岸の半壁山、富池口は均しく多くの兵を置いて守らせており、兩岸の賊は船で往来している。我が軍が田〔家〕鎮を破ろうと思えば、必ず先に南岸を奪わなければならない。昨年田〔家〕鎮を守れなかったのは、半壁山と富池口を賊に占拠され、勢いついに支えられなくなったのであり、故に南岸は必争の地である¹²³。

ここからは太平軍が田家鎮上流の長江北岸に長い防衛線を設け、強化された鉄鎖と長江南北兩岸の密接な連携によって湘軍の進攻を阻もうとしていたことがわかる。20日に羅沢南が半壁山から1キロメートル強の馬嶺坳に陣地を設けようとする、半壁山から数千名の太平軍が攻撃をかけ、田家鎮からも増援部隊が長江を渡って出撃した。羅沢南はこれを斥け、指揮彭奕嵩ら將校十数名を含む1,000名以上を殺した¹²⁴。

11月19日に楊載福らの水軍は再び蕪州で陳玉成の太平軍を破り、軍船70余隻を焼いた。

20日に陳玉成は小舟で湘軍陣地へ夜襲をかけ、「火球を乱擲し、北岸に火箭を放」¹²⁵⁾って湘軍を混乱に陥れようとしたが、湘軍はこれに動じなかった。

11月23日に秦日綱の率いる太平軍は羅沢南、塔斉布の軍と半壁山一帯で戦った。初め湘軍兵士は出撃した太平軍の多さ（10,000名前後と思われる）に驚き、逃亡しようとする者がいたが、李統賓がこれを捕らえて斬り、羅沢南が「まさに堅忍不拔でこれに勝たん」と檄を飛ばしたところ全軍は落ち着いた。湘軍が少ないのを見て「意甚だこれを軽んじた」秦日綱は軍を2手に分け、一方が羅沢南の軍を攻め、一方が富池口の塔斉布軍を攻めて両者が合流出来ないようにした。だが羅沢南の軍は半壁山を奪取して守備隊を壊滅させ、「湘潭、岳州以来、陸戦すること数十回に及んだが、これほど多くの賊を殺したことはなかった」という大勝利を収めた。太平軍は田家鎮へ敗退し、湘軍は長江に架けられた6本の鉄鎖、竹のとも綱7本を全て切断した¹²⁶⁾。

この日韋志俊、石鎮崙、韋以徳が南京から田家鎮へ至り、秦日綱と戦略について協議した。ここで秦日綱は「上游の妖魔は大変憎むべきであり、大胆にも興国州から馬鞍山、富池口などの地方へ至って作怪」¹²⁷⁾していること、これに対して太平軍は「鎮守の官員が防守に疎かで、兵士たちも怯えて命令に従わない」¹²⁸⁾と状況を説明した。そして韋志俊と石鎮崙、韋以徳は蕪州から動員した土八副將軍梁修仁らの3ヶ軍を率いて馬鞍山の北側から、秦日綱は配下の兵を率いて東側からそれぞれ進攻することにした。

11月24日に彼らが長江南岸に上陸すると、「図らずも残妖が兵を分けて向かって来て抵抗した」¹²⁹⁾とあるように羅沢南軍の攻撃を受けた。韋志俊の報告によると、石鎮崙、韋以徳の身近にいた将兵は「追散」され、2人はなお前進しようとしたが、後方に回り込んだ湘軍によって包囲された。危険と見た韋志俊は船に乗って退却し、秦日綱が2人の救援に向かったが、彼も富池口から出撃した塔斉布の軍に阻まれ、「前後に敵を受けて、ただ河辺から乗船して戻る他はなかった」。夕暮れになって石鎮崙、韋以徳の搜索をおこなったところ、逃げ戻った兵士の話から「二人は前方の妖魔を追って前進したが、妖によって囲まれ、均しく矛で搗かれて昇天した」と戦死したことが判明した。この日太平軍は「兵士で傷を受けた者は十に八、九」と多数にのぼり、石鎮崙、韋以徳意外にも梁修仁が陣亡し、溺死者を含めると「統計して千余人が昇天した」¹³⁰⁾という。

曾國藩はこの日の戦いについて、「(太平軍は)憤極まって敵討ちの軍を興し、一股でまず下流を攻め、わが軍が全部出撃するように誘い、別の一股で上流から渡河して陣地を襲おうとしたが、図らずも連戦連敗となった。これによって賊の計略は窮し、あえて南岸を窺おうとはせず、半壁山はついにわが軍のものとなった」とあるように、秦日綱らはまず富池口の塔斉布の陣地を襲い、羅沢南の軍を下流へおびき出したうえで、半壁山へ兵を送って陣地の奪回を図ったが失敗したと述べている。また湘軍は馬を捨てて船に乗り込もうとした「黄馬褂、黄龍風帽の賊」と「黄馬褂および獅鳳などの帽子の賊四名」¹³¹⁾を殺害したと報じており、これが石鎮崙、韋以徳らを指すと考えられる。

このように深刻な打撃を受けた太平軍であったが、戦況を好転させるための努力は続いた。11月25日に秦日綱と韋志俊は一度切断された長江の鉄鎖を再び半壁山の下までつなぎ、湘軍水師の進攻を阻もうとした。この4本の鉄鎖は川底に錨を降ろした船や筏と繋がっており、船や筏の上には砲や鉄砲が配置されていた。また船の中には水が蓄えられ、筏の外側には砂が塗られて、湘軍の火攻めに耐えられるようになっていた。この鉄鎖の上流には3、40隻の軍船が睨みをきかせ、下流にも5,000隻近い民間からの徴用船が停泊して「声勢を助」けた。鉄鎖の北端は田家鎮の街端にある呉王廟の太平軍陣地へつながり、そこには秦日綱らがいた。また太平軍は先の敗北に懲りて、南岸の半壁山には兵を置かなかったが、富池口に3カ所の陣地を構築して下流にある味方の船を支援した¹³²⁾。

11月27日に彭玉麟と蕭捷三が蘄州の太平軍を攻撃し、双方にかなりの死傷者が出た¹³³⁾。翌日湘軍の水軍が蘄州へ陣地を移すと、包囲されることを嫌った太平軍の水軍は田家鎮方面へ撤退した。12月1日に湘軍水師は田家鎮から5キロ弱の見峰咀へ到達し、楊載福、彭玉麟は塔齊布、羅沢南と「大挙して賊を破る策」を協議した。そして哨官たちの意見を容れて水軍を4つに分け、第1隊は鉄鎖の切断、第2隊は鉄鎖の上流にいる太平軍軍船の攻撃、第3隊は鉄鎖切断後に下流の民間船攻撃、第4隊は留守を担当することに決めた。また陸軍6,000人が長江南岸に布陣して「水師の声威を助ける」ことにした。

12月2日に湘軍は総攻撃を開始した。田家鎮の太平軍陣地は「千砲が環轟し、弾丸が落ちること雨の如し」と猛烈な抵抗を見せたが、水軍第1隊はこれに応じず、真っ直ぐに半壁山の下にある鉄鎖の前に向かった。太平軍の軍船がこれを阻もうとすると、第2隊が包囲して攻撃し、快蟹船2隻を焼いたところ、太平軍軍船は鉄鎖の援護をあきらめた。第1隊が鉄鎖の切断に取りかかると、鉄鎖を支える船や筏に乗っていた太平軍将兵は「色を失い、すぐに旗をなびかせ衆は乱れた」とあるように混乱に陥った【図2】。彼らは小舟で脱出を図り、下流の徴用船も「慌てて帆を揚げて逃げ出」したが、この時東南から強風が吹きつけたため、太平軍の船は進むことが出来ず、武穴鎮まで追撃した第3隊によって4,000隻が焼かれた。行き場を失った太平軍将兵は水に飛び込み、湘軍の船に助けを求めて殺された。また味方の船に這い上がろうとしたところを、沈没を恐れた将校に殺された者もいた。さらに火薬を積んだ大型船は風に煽られて南岸に近づき、湘軍の火攻めにあって爆発、炎上した。富池口の太平軍も総崩れとなり、水辺は将兵の死体で埋まった。

この決定的な敗北に、田家鎮の太平軍は「船が焼かれて帰るべき巢がなく、食糧もなく、弾丸も火薬もなくなった」とあるように戦闘能力を失った。この夜、秦日綱と韋志俊は自ら陣地に火を放ち、黄梅県へ向けて撤退した。12月2日に蘄州に残っていた陳玉成の部隊は、都司楊名声、教諭唐訓方の率いる湘軍水師2,000名と戦って勝利した。だが田家鎮敗北の知らせが伝わると、3日夜に城を捨てて広済県へ向かった¹³⁴⁾。さらにこの頃遠く離れた湖南寧遠県では、太平天国に呼応した昇平天国の朱洪英反乱軍が王鑫率いる湘軍に敗北した¹³⁵⁾。湖南を攻め、両広地方へつらなるルートを切り開こうとした楊秀清の戦略は破綻したのであ



図2 田家鎮の戦い（『平定粵匪図』第二幅、攻破田家鎮収復蕪州図、国立故宫博物院蔵）
 太平軍が長江に設けた水上要塞の様子がよくわかる。この絵の構図は『蕩平髮逆図記』にも用いられて有名だが、『平定粵匪
 戦図』に田家鎮の戦いの図はない。代わって描かれたのは固原提督桂明らの軍が蕪州を攻撃している絵図（冊五、収復蕪州
 図、東洋文庫蔵）であり、清軍の功績を強調する意図が明確である。だがこの蕪州の戦いの主力は湘軍の水軍であった。

る。

小 結

本章の内容は次のようにまとめられる。湘潭での敗北後、石祥禎らの太平軍は湖南西部の常德を攻略し、湖北西部を転戦してきた曾天養軍と合流して岳州で次の戦いに備えた。同じ頃曾国藩も湘軍の再編を進めたが、脱走兵や物資の掠奪が多かった部隊を解散し、統率力のない将校を再び採用しないなど徹底した兵員整理を行った。また敵前逃亡に対して厳罰を加えるといっばうで、太平軍将兵を一人殺害するたびに賞金と昇進を約束するなど賞罰の規定を明確にした。この再編によって湘軍は太平軍将兵を組織的かつ効率的に殺害するための武装集団に特化され、戦闘力は飛躍的に増大した。それは湖南の治安維持に断固たる措置を取った曾国藩の手法の現れであると共に、清朝官僚とその家族、清軍将兵を「妖魔」と見なし、容赦なく殺害した太平天国の宗教的な排他性が生み出した一つの反作用であった。

湘軍が再編を進めている間、太平軍は武昌への攻略を進めた。武昌の清軍は人数が少なく、漢陽一帯の太平軍の戦力が低いことに助けられていたが、援軍が模様眺めをする中で旗人司令官である青麴と崇綸の対立が深まり、食糧が底をついたところを太平軍の攻撃を受けて陥落した。初め咸豊帝は青麴の努力を称えていたが、城を脱出した彼が長沙へ向かったことを知ると激しく怒り、処刑を命じた。青麴の死後、曾国藩は呉文鎔や張亮基の汚名を晴らすために崇綸を告発したが、彼が旗人である青麴を擁護した背景には清朝の体制とりわけ恣意的な裁断を下す咸豊帝に対する失望があった。

7月に入ると、湘軍は水陸両軍に分かれて岳州への攻撃を開始した。岳州城は守りきれないと見た曾天養は城陵磯、臨湘県へと退却した。厳しい戦況について報告を受けた石達開は、下流に退いて防衛体制を固めることを示唆したが、武昌からの増援を得た現地軍は岳州の奪回にこだわり、曾天養は不用意な戦いで殺された。北伐軍における吉文元がそうであったように、首領クラスの戦死は全軍に大きな動揺を与え、相次ぐ敗北によって生まれた湘軍に対する恐怖心が重なって多くの逃亡者を生んだ。8月下旬に韋志俊らは総攻撃を試みたが、水軍が手薄になった隙を湘軍に突かれて敗退した。

岳州での勝利によって湘軍の士気は大いに上がったが、武昌奪回の命令を受けた彼らは湖南省外へ出兵するために兵站を整えなければならなかった。9月に湘軍は崇陽県の呼応勢力や水軍の残余を掃蕩しながら、武昌への進攻を開始した。これに対して太平軍は韋志俊、石祥貞が南京へ急遽呼び戻され、代わって守備を任された石鳳魁、黄再興には軍事的な才覚が欠けていた。また楊秀清は湖北における戦況の変化に対する認識が欠けており、秦日綱も陣地の固守を命じるばかりで柔軟な対応が出来なかった。各地の地方軍も個別に撃破されてしまい、湘軍の包囲攻撃を受けた石鳳魁らは武昌を放棄して田家鎮へ退いた。

湘軍による武昌奪回の知らせが伝わると、驚喜した咸豊帝は曾国藩を湖北巡撫代理に任命した。だが在野の漢人勢力が台頭することの危険を指摘されて命令を撤回し、兵部侍郎銜と

して引き続き湘軍を統率させることにした。この進言を行ったのは東南沿海地方出身の漢人エリートたちであり、彼らは新興勢力である曾国藩らの政治的台頭を快く思っていなかった。つまり曾国藩は旗人勢力だけでなく、既得権益の維持を図る漢人エリートとも競合しなければならなかった。彼は湘軍の幹部となった塔齊布や漢人に対する偏見を持たない荊州將軍官文を通じて旗人勢力との協力関係を模索するいっぽうで、江西巡撫陳啓邁などの漢人エリートと激しく対立することになる。

さて武昌を撤退した太平軍は、秦日綱の指揮のもと田家鎮で湘軍を迎え撃つ準備を進めた。楊秀清も水上要塞の製造を指示し、側近を派遣するなどテコ入れを行った。また太平天国は湘軍の進攻前に武昌で科挙を実施し、長江沿岸の占領地域では人々に「蓄髮貢納」させるなど地域経営を行っていたが、これらの努力は成果を挙げることなく湘軍の進攻にさらされた。

11月に始まった田家鎮の攻防戦は、長江中流域の戦局を左右する重要な戦いであった。この戦いで太平軍は湘軍を上回る兵力を投入したが、結果は惨敗に終わった。その第一の原因は司令官である秦日綱が湘軍を侮り、安易に戦いを挑んだことに求められる。また忘れてならないのが元々食糧の調達を任務としていた西征軍の戦闘能力が弱く、それが旺盛な戦意をもつ湘軍の攻撃の前に脆さを露呈してしまった点であろう。むろん太平軍も切断された鉄鎖の再設置を行うなど、戦況を好転させるための努力を続けた。だがこれらの抵抗も湘軍のよく練られた戦略の前には役に立たず、石鎮崙など多くの犠牲者を出した。

この一連の戦いで湘軍との戦闘を経験した陳玉成は、その報告の中で湘軍の戦闘力の高さを特筆している。とくに曾国藩が多くの労力を注いで建造した戦闘艦からなる水軍は、民間からの徴用船を主力としていた太平天国の水軍に対して圧倒的な威力を発揮した。加えて太平軍將兵の間には度重なる敗北に湘軍に対する恐怖感が広がり、傷口を広げてしまったように思われる。

この力量差は何によるものだろうか——金田での蜂起以来、清朝の正規軍（緑營、八旗）に対して圧倒的な優位に立っていた太平軍の戦いぶりを考えると、この結果には驚きを禁じ得ない。その実太平軍と湘軍は、掲げた理念こそ上帝崇拜に基づくあるべき中国の復興、郷土の防衛と清朝に対する忠誠と異なっていたが、兵士の担い手や組織原理については類似点多かった。むろん両者の一番の違いは太平軍の指導層が下層知識人と非エリートの出身だったのに対して、湘軍は科挙受験を経験した儒教エリートが中核を占めていた。彼らは羅沢南が「書生が兵を率いる」と評されたように軍事の専門家ではなかったが、太平軍打倒のために体系的な戦略を練り、危機を回避しながら最大限の効果を生み出す行動力を備えていた。これら文人エリートの組織形成、運営能力こそは湘軍を勝利に導いただけでなく、19世紀中国の社会変容を突き動かす原動力になったように思われる。

この困難な局面を打開すべく、太平天国随一の智将であった石達開が取った戦略については、章を改めて検討することにした。

註

- 1) 菊池秀明「西征軍の湖南、湖北席卷と湘軍の登場」。
- 2) 簡又文『太平天国全史』中冊、香港猛進書屋、1962年。
- 3) 羅爾綱『湘軍兵志』中華書局、1984年。同『太平天国史』中華書局、1991年。
- 4) 張守常、朱哲芳『太平天国北伐、西征史』廣西人民出版社、1997年。
- 5) 賈熟村『太平天国時期的地主階級』廣西人民出版社、1991年。同「太平天国時期地主階級内部的争闘」(北京太平天国史研究会編『太平天国學刊』一、中華書局、1983年、305頁)。
- 6) 崔之清主編『太平天国戦争全史』2、戦略發展、南京大学出版社、2002年。
- 7) 龍盛運『湘軍史稿』四川人民出版社、1990年。
- 8) 朱東安『曾國藩伝』四川人民出版社、1984年。同『曾國藩幕府研究』四川人民出版社、1994年。同『曾國藩集團与晚清政局』華文出版社、2003年。
- 9) 王繼平『湘軍集團与晚清湖南』中国社会科学出版社、2002年。
- 10) P. H. Kuhn, *Rebellion and its Enemies in Late Imperial China: Militarization and Social Structure 1796-1864*, Harvard University Press, 1970.
- 11) 近藤秀樹『曾國藩』人物往来社、1966年。
- 12) 台湧奏、咸豐四年四月二十二日、中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』(以下同書は『鎮圧』と略称) 14、社会科学文献出版社、1994年、114頁。
- 13) 台湧奏、咸豐四年五月初一日『鎮圧』14、194頁。
- 14) 台湧奏、咸豐四年五月初一日『鎮圧』14、525頁。ただし清軍が応城県を攻撃した時、城内には「逆衆三、四百人」が残っていたに過ぎず、城を出て反撃しながら撤退した。
- 15) 諭内閣、咸豐四年六月十六日『鎮圧』14、588頁。
- 16) 『清史稿』卷386、列伝175、官文(中華書局版、38、11,712頁)。『清史列伝』卷45、大臣畫一檔後編一、官文(中華書局版、1987年、3579頁)。例えば湖北按察使、布政使として官文のもとで働いた羅遵殿は、官文について「足見其於兵事未曾用心、亦毫無定見」と述べている(羅遵殿致李希菴札、佚名『道咸同光名人手札第一集』近代中国資料叢刊、文海出版社、1970年、45頁)。また『清史稿』は官文が「馭下不嚴、用財不節」で、胡林翼は彼を弾劾しようとしたが、糧台營務の閻敬銘から「官文心無成見、兼隸旗籍、每有大事、正可借其言以伸所請」と説得され、官文との協力を模索したと述べている。なお龍盛運『湘軍史稿』172頁および賈熟村「太平天国時期地主階級内部的争闘」を参照のこと。
- 17) 官文等奏、咸豐四年四月二十二日『鎮圧』14、116頁。光緒『荊州府志』卷26、武備志、兵事。
- 18) 官文等奏、咸豐四年四月二十二日『鎮圧』14、344頁。
- 19) 官文等奏、咸豐四年五月二十七日『鎮圧』14、454頁。
- 20) 軍機大臣、咸豐四年六月十六日『鎮圧』14、589頁。
- 21) 駱秉章奏、咸豐四年五月二十五日『鎮圧』14、447頁。光緒『華容県志』卷6、兵事。なお林紹璋は湘潭における敗北の責任を問われ、解任のうえ江西湖口県の守備を命じられた(張德堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名下、中国史学会編、中国近代史資料叢刊『太平天国』3、神州国光社、1952年、59頁)。
- 22) 駱秉章奏、咸豐四年六月初十日『鎮圧』14、548頁。
- 23) 同治『澧州志』卷19、祥異志、兵難。また黎庶昌『曾國藩年譜』卷3(岳麓書社、1986年、44頁)に「(曾天養軍)由太平口南入洞庭、与西湖股匪合併、陷澧州、安郷等城」とある。

- 24) 光緒『桃源県志』巻6、兵刑志、兵制。また杜文瀾『平定粵寇紀略』巻3（太平天国歴史博物館編『太平天国資料匯編』第1冊、中華書局、1980年、36頁）には「賊復竄至辰州府之辰龍閣、爲兵勇剿退」とある。
- 25) 李如昭『鏡山野史』（『太平天国』3、6-9頁）。
- 26) 駱秉章奏、咸豐四年三月初三日、軍機處奏摺録副、農民運動類847,919号、中国第一歴史檔案館蔵に「縣屬豐樂、歸代二都有土匪王揚元……等、乘逆船上竄、糾約夥党、私造機會、希圖搶掠……。〔二月〕二十二日該匪等糾約二千餘人、直撲县城」とある。なおこの上奏文は『駱文忠公奏議』『鎮圧』共に収録されていない。
- 27) 光緒『華容県志』巻6、兵事に「巴陵王光鼎偃逆声勢、糾監邑土匪張台元暨札馬洲乱民数十人、於三月十七夜薄城、逐官焚署」とある。ここで張台元は沔陽州人で、1852年に太平軍に参加して頭目となり、湖北監利、潜江県で活動していた（拙稿「西征軍の湖北、湖南における活動と湘軍の登場」未発表）。
- 28) 李如昭『鏡山野史』（『太平天国』3、7頁）。
- 29) 同治2年『武陵県志』巻25、武備志第3、紀兵。また同治7年『武陵県志』巻16、紀兵にも「咸豐四年夏五月、粵寇犯郡、兵吏皆走、居民多俘以去……。其資糧財賄之在市者皆尽。縦党四掠、野無完堵」とある。
- 30) 李如昭『鏡山野史』（『太平天国』3、7頁）。石祥貞らの常德撤退については、駱秉章奏、咸豐四年六月十九日『鎮圧』14、601頁にも「逆賊攻陷常德後、聞援剿西路漢軍將至、星夜將所掠錢米輜重擄取民船裝運出境、西湖一帶現無賊踪」とある。ここから見る限り、太平軍の常德攻略は物資の獲得が目的で、予想される湘軍の岳州攻撃に備えるためであったと考えられる。
- 31) 青麐奏、咸豐四年五月初二日『鎮圧』14、208頁。
- 32) 青麐奏、咸豐四年四月十三日『鎮圧』14、15頁。ただし長江沿岸の太平軍陣地には竹籬や鉄釘を敷きつめた濠溝を備えた土城、木柵が築かれ、「防範極爲週密」であったという。
- 33) 青麐奏、咸豐四年四月十三日『鎮圧』14、13頁。
- 34) 張德堅『賊情彙纂』巻9、賊教、礼拝に「偽誥諭有『再過三次礼拝、不能収復武昌、定即治罪』諸語」（『太平天国』3、263頁）とあり、崔之清氏らはこれを楊秀清が韋志俊らに与えた指示と見なしている（『太平天国戦争全史』2、戦略発展、1,007頁）。
- 35) 青麐奏、咸豐四年五月初二日『鎮圧』14、208頁。ここで青麐は太平軍の兵力を「漢口現在逆船將以数千計、人則二万有余」としたが、軍船の数から推計した誇大な数字と考えられる。崇綸は同じ日付の上奏で「賊数雖無確定、不過数千之衆」と述べており（崇綸奏、咸豐四年五月初二日、同上書215頁）、曾天養の軍が岳州に残ったことを考えると10,000人強が妥当であろう。ちなみに青麐は別の上奏で「其偽翼王（石達開）已由廬州剿敗來漢、是以倍形猖獗」（青麐奏、咸豐4年五月初二十七日、同上書460頁）と述べているが、石祥禎の誤り。「火牛の法」とは戦国時代に斉の田単が使った奇策で、日本では木曾義仲が倶利伽羅峠の戦いで用いたとされる。
- 36) 青麐奏、咸豐四年五月二十四日『鎮圧』14、427頁。また台湧奏、同年6月初7日、同書527頁によると、舒倫保は落馬が原因で古傷が痛み、高齢もあって出陣出来なかった。また徳安に到着した桂明も病気を理由に進撃を渋ったとある。
- 37) 青麐奏、咸豐四年五月初二日『鎮圧』14、212頁。
- 38) 崇綸奏、咸豐四年五月初二日『鎮圧』14、215頁。
- 39) 青麐奏、咸豐四年五月十七日『鎮圧』14、357頁。
- 40) 青麐奏、咸豐四年五月二十七日『鎮圧』14、458頁。

- 41) 青麿奏、咸豊四年六月十九日『鎮庄』14、598頁。
- 42) 民国『湖北通志』卷71、武備志9、兵事5、粵匪。
- 43) 青麿奏、咸豊四年六月十九日『鎮庄』14、598頁。また台湧奏、咸豊四年六月初十日、同書546頁も「此次省城失守、実縁城中奸匪内応所致」「賊至、迨午後城外甬經接仗、城中即内応四起、而兵勇不下万人、竟不能隨即撲滅、登城力捍、遽致省垣重地失於倉卒之間」「聞崇綸、青麿及在城文武大小各員半已縋城得脱、不知去向」と述べている。
- 44) 張徳堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名下、陳玉成に「五月杪由武昌縣入梁子湖、繞至省城東面。六月初二日帶五百賊衆、縋城而上、以致官兵潰散、遂陷鄂省」(『太平天国』3、66頁)とある。
- 45) 青麿奏、咸豊四年六月十九日『鎮庄』14、598頁。
- 46) 内閣、咸豊四年七月十五日『鎮庄』15、39頁。『清史稿』卷397、列伝184、青麿、中華書局版11,798頁。
- 47) 官文奏、咸豊四年七月十五日『鎮庄』15、103頁。
- 48) 曾國藩奏、咸豊四年九月二十七日『鎮庄』15、657頁。
- 49) 『清史稿』卷397、列伝184、崇綸、中華書局版、11,800頁。
- 50) 黎庶昌『曾國藩年譜』卷3(湘軍史料叢刊、岳麓書社、1986年、41頁)。
- 51) 曾國藩奏、咸豊四年四月十二日『鎮庄』13、637頁。また未発の遺摺は『曾國藩全集』奏稿一、岳麓書社、1987年、139頁に収められており、彼の率いた陸軍部隊が太平軍と戦って潰え、これを見た水軍が船を捨てて逃亡して「潰散一半、船炮亦失三分之一」と記している。
- 52) 黎庶昌『拙尊園叢稿』卷3。同書によると、当初北京の宮廷内では「在籍紳士」に過ぎない曾國藩が10,000人の私的軍隊を組織し、太平軍に勝利したことを危ぶむ声もあった。だが翰林院編修の袁漱六が咸豊帝に謁見して湘潭の戦いについて詳細を報告すると、咸豊帝は大いに悦んだという。なお袁漱六は湖南湘郷県人で、号は芳瑛。曾國藩の長女が彼の息子袁秉楨に嫁ぐなど、両家は姻戚関係にあった(羅紹志、田樹徳『曾國藩家世』江西人民出版社、1996年、240頁)。
- 53) 諭内閣、咸豊四年四月二十三日『鎮庄』14、121頁。この時塔齊布は総兵衛と巴圖魯の称号を与えられた。また彼の提督代行職就任が持つ意義については朱東安『曾國藩伝』113頁。
- 54) 致澄弟温弟沅弟季弟、咸豊四年四月二十日『曾國藩全集』家書一、岳麓書社、1985年、253頁。
- 55) 王闓運『湘軍志』曾軍篇第2(湘軍史専刊之一、岳麓書社、1983年、24頁)。
- 56) 致澄弟温弟沅弟季弟、咸豊四年四月二〇日『曾國藩全集』家書一、253頁。
- 57) 曾國藩奏、咸豊四年四月十二日『鎮庄』13、637頁に「現在臣処一軍、除潰敗及汰遣外、水師僅留湘潭大勝五營二千余人、陸路僅存戰勝湘潭与留防平江之勇二千余人」とある。また龍盛運『湘軍史稿』116頁を参照のこと。曾國葆は曾國藩の末の弟で、この時処分を受けて「黜黜歸去、築室紫田山中、閉絶人事、身与世若兩不相収」であったが、1858年に三河鎮の戦いで曾國華が戦死すると、曾貞幹と改名して再び胡林翼のもとで軍を率いた(羅紹志、田樹徳『曾國藩家世』156頁)。
- 58) 曾國藩奏、咸豊四年四月十二日『鎮庄』13、637頁。同奏、同年五月初八日『鎮庄』14、271頁。
- 59) 曾國藩奏、咸豊四年二月十五日『曾國藩全集』奏稿一、106頁。駱秉章奏、同年六月初十日『鎮庄』14、548頁。胡林翼は益陽県人で、陶澍の親戚にあたる。貴州安順、鎮遠、黎平府の知府を歴任し、明代の戚継光に倣った私兵組織を作り、少数民族反乱の弾圧に功績を挙げた。彼が湖北に到着すると、曾國藩は駱秉章と協議のうえ装備を支給し、岳州の守備と湖北南部の反乱軍鎮圧に当たらせていた。なお P. H. Kuhn, *Rebellion and its Enemies in Late Imperial China*, pp. 117 を参照。

- 60) 『曾文正公雜著』卷1、曉諭新募鄉勇。
- 61) この他に重要な要素として、拡大した兵力を支える兵糧の確保が挙げられる。駱秉章奏、咸豊四年五月二十二日『鎮圧』14、411頁によれば、湘軍の兵餉は省内各地に紳士を派遣して勸諭を行うことで調達したが、「本省地瘠民貧、兼之屢被賊擾……、地方耗斁迥異他方、其間一二富戸一捐再捐、漸形困敝」とあるように、湖南自身が太平軍の進攻を受けたこともあって資金は集まらなかった。そこで曾国藩らは広東、四川で捐納を募ると共に、広東の粵海関から六万両を工面させ、これを当面の経費に充てた（曾国藩奏、咸豊四年七月初五日『曾国藩全集』奏稿一、151頁）。ただし補給体制が確立するのは1855年に湖南で釐金局が設けられて以後であった。
- 62) 駱秉章奏、咸豊四年五月二十五日『鎮圧』14、447頁。駱秉章等奏、同年七月十一日『鎮圧』15、20頁。また塔斉布の新墟市占領と東路軍の戦いについては駱秉章奏、同年六月初十日『鎮圧』14、550頁。
- 63) 駱秉章等奏、咸豊四年七月十一日『鎮圧』15、20頁。
- 64) 翼王石達開覆秋官正丞相曾添養岳州戰守事宜訓諭（太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』中華書局、一九七九年、一七六頁）。なお石達開は1853年12月に安慶を離れて南京へ戻っていた（張徳堅『賊情彙纂』巻1、劇賊姓名上、石達開、『太平天国』3、48頁）。
- 65) 駱秉章等奏、咸豊四年七月十六日『鎮圧』15、57頁。
- 66) 駱秉章等奏、咸豊四年七月二十一日『鎮圧』15、79頁。この時塔斉布は陳輝龍に慌てて戦わないように諫めたが、陳輝龍は聞き入れなかったとある。また夏燮は江蘇上元県人、広西陳亜貴反乱の鎮圧に加わり、褚汝航と共に湘軍水師の創設に携わった（『清史稿』巻490、列伝277）。
- 67) 朱東安『曾国藩伝』、106頁。なお王闓運『湘軍志』水師篇第六によると、湘軍の勝利を知った陳輝龍は太平軍を取るに足らないと考え、「吾習水戦三十年、諸軍無以為憂」と豪語した。出撃した広東水軍は「旌旗鮮明、刀矛如霜雪、洋装銅炮震山浦、諸軍皆自失、以為不及」とその威容で周囲を圧倒したため、楊載福は「乗小舟觀戦」とあるように戦いに加わらなかった（湘岳叢書社版、73頁）。朱東安氏はここから湖南人と他省出身者の対立を指摘し、彭玉麟は故意に救援に向かわなかったと述べている。
- 68) 駱秉章等奏、咸豊四年七月二十一日『鎮圧』15、79頁。塔斉布等奏、同年八月三十日、同書515頁。
- 69) 塔斉布等奏、咸豊四年八月三十日『鎮圧』15、515頁。
- 70) 駱秉章等奏、咸豊四年七月二十一日『鎮圧』15、79頁。
- 71) 塔斉布等奏、咸豊四年八月三十日『鎮圧』15、515頁。
- 72) 駱秉章等奏、咸豊四年閏七月初三日『鎮圧』15、165頁。
- 73) 塔斉布等奏、咸豊四年閏七月初九日『鎮圧』15、197頁。
- 74) 諭内閣、咸豊四年閏七月二十日『鎮圧』15、270頁。
- 75) 塔斉布等奏、咸豊四年閏七月初九日『鎮圧』15、200頁。
- 76) 駱秉章奏、咸豊四年閏七月十六日『鎮圧』15、256頁。
- 77) 塔斉布等奏、咸豊四年八月初四日『鎮圧』15、339頁。
- 78) 塔斉布等奏、咸豊四年閏七月初九日『鎮圧』15、201頁。
- 79) 向榮奏、咸豊四年八月初四日『鎮圧』15、339頁。ここで向榮は捕虜や難民の供述として「十九日戦敗之後……、已往調賊渠韋俊、羅大綱聚集湖北、安徽水陸各賊來此與官軍決戦」と報じている。また城内の食糧不足のため「自本月初一日以來、城中婦女被賊驅令出城穫稻、乘間逃出者不下三四万人」と述べている。

- 80) 張德堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名下、石鳳魁（『太平天国』3、56頁）。
- 81) 張德堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名下、黃再興（『太平天国』3、57頁）。
- 82) 塔齊布等奏、咸豐四年八月初四日『鎮庄』15、339頁。
- 83) 塔齊布等奏、咸豐四年八月十九日『鎮庄』15、451頁。
- 84) 塔齊布等奏、咸豐四年八月初四日『鎮庄』15、339頁。
- 85) 塔齊布等奏、咸豐四年八月十九日『鎮庄』15、451頁。
- 86) 同治『崇陽縣志』卷12、雜記、災祥。
- 87) 塔齊布等奏、咸豐四年八月十九日『鎮庄』15、451頁。
- 88) 張德堅『賊情彙纂』卷1、劇賊姓名上、秦日綱（『太平天国』3、50頁）。
- 89) 燕王秦日綱命殿右參拾檢点陳玉成堅守圻州誨諭、太平天国甲寅四年八月二十四日『太平天国文書彙編』178頁。年月は文中の記載（陳玉成の報告を秦日綱が受け取った期日）に基づく。
- 90) 塔齊布等奏、咸豐四年八月二十二日『鎮庄』15、471頁。
- 91) 塔齊布等奏、咸豐四年八月二十七日『鎮庄』15、501頁。
- 92) 燕王秦日綱上東王楊秀清報告武昌失守情況稟奏、太平天国甲寅四年九月二十九日『太平天国文書彙編』221頁。
- 93) 塔齊布等奏、咸豐四年八月二十七日『鎮庄』15、501頁。
- 94) 殿右參拾檢点陳玉成上燕王秦日綱報告軍情稟申、太平天国甲寅四年九月初七日『太平天国文書彙編』221頁。
- 95) 塔齊布等奏、咸豐四年八月二十七日『鎮庄』15、501頁。ちなみに清朝側の死傷者は二百人に満たなかった。
- 96) 張德堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名下、陳桂堂（『太平天国』3、70頁）。
- 97) 楊霈奏、咸豐四年八月二十四日『鎮庄』15、482頁。この時の情報は職員楊衍桐の報告によるもので、内容も簡略なものだった。
- 98) 塔齊布等奏、咸豐四年八月二十七日『鎮庄』15、501頁の硃批部分。
- 99) 諭内閣、咸豐四年九月初五日『鎮庄』15、542頁。
- 100) 曾國藩奏、咸豐四年九月十三日『曾國藩全集』奏稿一、255頁。
- 101) 諭内閣、咸豐四年九月十二日『鎮庄』15、593頁。
- 102) 薛福成『庸庵文統編』卷下。
- 103) 朱東安「促使咸豐皇帝収回曾國藩署理鄂撫成命者並非祁雋藻」（北京太平天国歴史研究会編『太平天国學刊』2、中華書局、1985年、178頁）。
- 104) 沈葆楨奏、咸豐四年九月初九日『鎮庄』15、583頁。ただし曾國藩は後に道員だった沈葆楨の起用を上奏している（咸豐十年五月初三日『曾國藩全集』奏稿二、1,149頁）。
- 105) 唐壬森奏、咸豐四年九月初九日『鎮庄』15、581頁。
- 106) 楊重雅奏、咸豐四年九月初九日『鎮庄』15、582頁。
- 107) 曾國藩奏、咸豐四年九月十三日『曾國藩全集』奏稿一、255頁の硃批部分。
- 108) 冬官正丞相羅大綱覆國宗石鳳魁請免糧苦差紅粉事照會、太平天国甲寅四年九月二十三日『太平天国文書彙編』243頁。
- 109) 何潮元は広西人、元々「符水」で病気を治す仕事をしていたが、上帝会入会後はこれを「妖符」として禁止され、「内医」として医療を担当した。1853年に恩賞丞相となり、54年には林啓容と共に九江の守備を任された（張德堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名下、何潮元『太平天国』3、70頁）。

- 110) 吉志元は広西人、吉成鳳の子で、父親の死後に恩賞丞相となった。張徳堅『賊情彙纂』には「賊中初起事也、吉姓從逆最先、一家數十人分隸各賊統下」（巻2、劇賊姓名下、吉志元、『太平天国』3、71頁）とあり、北伐軍を率いた吉文元と同族ではないかと推測されるが、詳細は不明。
- 111) 東王楊秀清命燕王秦日綱鎮守田家鎮並攻取漢陽等処誥諭、太平天国甲寅四年九月十五日『太平天国文書彙編』、178頁。
- 112) 東王楊秀清命燕王秦日綱在田家鎮安箏置砲誥諭、太平天国甲寅四年九月二十九日『太平天国文書彙編』、180頁。
- 113) 張徳堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、石鳳魁・黃再興（『太平天国』3、56-57頁）。
- 114) 東王楊秀清命国宗韋俊等備礼祝賀王四殿下滿月誥諭、太平天国甲寅四年九月二十四日『太平天国文書彙編』、179頁。
- 115) 燕王秦日綱覆東王楊秀清防守田家鎮趕造木箏鉄鍊稟奏、太平天国甲寅四年十月初八日『太平天国文書彙編』、223頁。
- 116) 塔齊布等奏、咸豊四年八月三十日『鎮庄』15、513頁。
- 117) 塔齊布等奏、咸豊四年九月初七日『鎮庄』15、571頁。
- 118) 塔齊布等奏、咸豊四年九月初七日『鎮庄』15、570頁。楊霈等奏、同年九月十六日、同書605頁。
- 119) 曾國藩等奏、咸豊四年九月二十七日『鎮庄』15、653頁。
- 120) 張徳堅『賊情彙纂』巻3、偽官制、偽科目（『太平天国』3、110頁）。ただし11月に楊秀清は秦日綱に対して、官員の推薦はよく調査して行うべきであり、「徇情濫保」してはならないと命じている（燕王秦日綱為遵諭保举官員毋得徇情事覆東王楊秀清稟奏、太平天国甲寅四年十月二十三日『太平天国文書彙編』、228頁。）
- 121) 燕王秦日綱覆翼王石達開軍情稟報、太平天国甲寅四年十月二十日『太平天国文書彙編』、228頁。
- 122) 曾國藩等奏、咸豊四年九月二十七日『鎮庄』15、653頁。
- 123) 曾國藩等奏、咸豊四年十月初七日『鎮庄』16、35頁。
- 124) 曾國藩の上奏によると、この時湘軍は丞相林紹璋を殺したことになっているが、明らかな誤り。「偽指揮彭姓」とは殿前丞相右三十八指揮彭奕嵩のことで、富池口で陣地構築に当たっていたが、檢点曾鳳伝から蘄州へ赴いて陳玉成を援助するように要請されていた（張徳堅『賊情彙纂』巻二、劇賊姓名下、彭奕嵩、『太平天国』3、73頁および『太平天国文書彙編』、242頁）。
- 125) 曾國藩等奏、咸豊四年十月初七日『鎮庄』16、35頁。
- 126) 曾國藩等奏、咸豊四年十月十四日『鎮庄』16、71頁。ここで曾國藩は太平軍の兵力が2万余人であったが、2,600名の羅沢南軍はこれを破って数千人を殺害したと報じている。秦日綱が楊秀清に宛てた報告では「兵士受傷者数百余名、水浸斃者約数百余名」と述べており、曾國藩が湘軍の功績を印象づけるために誇大報告をしたのは明らかである。ただし秦日綱はこの日指揮黃鳳岐、承宣吉志元らが戦死したことを報じており、太平軍に甚大な損害があったことは間違いない（燕王秦日綱上東王楊秀清報告半壁山敗退情況及殿左肆拾柒指揮黃鳳岐等犧牲稟奏、太平天国甲寅四年十月二十日『太平天国文書彙編』、224頁）。
- 126) 曾國藩等奏、咸豊四年十月十四日『鎮庄』16、71頁。
- 127) 燕王秦日綱上東王楊秀清報告半壁山敗退国宗石鎮崙等犧牲稟奏、太平天国甲寅四年十月二十日『太平天国文書彙編』、225頁）。
- 128) 燕王秦日綱上東王楊秀清報告半壁山敗退情況及殿左肆拾柒指揮黃鳳岐等犧牲稟奏、太平天国甲寅四年十月二十日『太平天国文書彙編』、224頁
- 129) 燕王秦日綱上東王楊秀清報告半壁山敗退国宗石鎮崙等犧牲稟奏、太平天国甲寅四年十月二十日

『太平天国文書彙編』、225 頁)。

- 130) 国宗提督軍務韋俊上東王楊秀清報告田家鎮戰況稟奏、太平天国甲寅四年十月二十日頃『太平天国文書彙編』、226 頁)。
- 131) 曾國藩等奏、咸豐四年十月十四日『鎮圧』16、71 頁。
- 132) 曾國藩等奏、咸豐四年十月二十日『鎮圧』16、111 頁。
- 133) 曾國藩等奏、咸豐四年十月十四日『鎮圧』16、71 頁。
- 134) 曾國藩等奏、咸豐四年十月二十日『鎮圧』16、111 頁。
- 135) 駱秉章奏、咸豐四年十一月初二日『鎮圧』16、183 頁。駱秉章によると、この時期広東、広西から湖南へ進入した反乱軍は「皆以応接江南大股逆賊為名、紅巾、黄巾、效賊装束、同時並起」とあるように太平天国との連携を名乗るケースが多かった。とくに朱洪英の昇平天国軍は「太平後営龍鳳旗」「太平天国將軍劉大黃旗」など太平天国の名を冠した黄旗を多用していた。朱洪英反乱軍の頭目の一人である胡有禄は丞相羅大綱と面識があり、「今年二月羅大綱有信、属其前往会合」とあるように羅大綱の働きかけを実際に受けたという(同奏、咸豐五年九月十二日『駱文忠公奏稿』卷3)。なお菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2009 年、332 頁参照。また楊秀清の戦略については本書第 7 章を参照のこと。

